北アメリカ先住民の人口推定

佐藤　円

はじめに
一、ムーニー＝クローバー説の成立
二、ドビンズ説の登場
三、一九八〇年代以降の動向
おわりに

はじめに

今から約五〇〇年前、コロンブスが西半球に到達した時、彼は「新世界」を「発見」したわけではなかった。西半球には、彼がやって来るずっと以前から、多くの人々が住み続けており、独自の世界を築き上げていたのである。しかし、コロンブスによる「発見」は、西半球の先住民にとっても、歴史を転換させる重大な出来事であった。なぜなら、一四九二年を境にして彼らの人口は急速に減少していき、ある者たちは、絶滅へと追いやられていったからである。この人口動態上の大惨事は、まさに「世界史上最大のジェノサイド」[1]と呼ぶに相応しいものだった。

さて、それではいったい、大規模な人口崩壊が発生する以前の西半球各地には、どの位の先住民が生活していたのであろうか。この問題をめぐる論争は、すでに「発見」直後の一六世紀から始められており、以来今日に至るまで、連綿と続けられてきている。特にその中でも、当初から強い関心を集め、激しい議論が戦わされてきたのは、カリブ海地域とメソアメリカの先住民人口についてであった。これらの地域では、非常に早い時期から、ヨーロッパ人と先住民の接触が開始されていたため、探検家、軍人、宣教師といった人々が先住民の数について、しばしば記録を残していた。それらが、論争に材料を提供してきたのである。[2]

これに対し、小論で取り扱う北アメリカについては、カ

史苑（第五四巻二号）

リフォルニアの例を除くと、比較的最近になるまで、活発な議論の対象とはされてこなかった。この原因は、やはり何と言っても、他の地域に比べて、史料が絶対的に不足しているということにある。特に内陸部については、東海岸、南東部、南西部での最初の接触があってからずっと後になるまで、ヨーロッパ人の侵入を受けなかったため、古い時代の先住民に関する記録が、ほとんど残されていないのである。[3] それゆえ、ヨーロッパ人が到来する以前の先住民人口について、本格的な研究が行われるようになってからも、限られた史料を用いて見積られる北アメリカの推定値は、長らく低いものであり続けた。そして、この低い推定値を根底から支えていたのは、「発見」以前の北アメリカが、古代文明を有するメキシコ以南の地域に比べ、相対的に文化程度が低く、人口も希薄な土地であったとする研究者たちの先入観であった。[4]

しかし現在、このような北アメリカに対する認識は、新たな先住民人口の推定が発表されるたびに揺らいでいる。かつて一〇〇万人前後が一般的だった推定値は、様々な推定方法が考案されるにつれて上昇し、最近では、五〇〇万人から一八〇〇万人の間の値が主流になってきている。これらの高い推定値が提示している、ヨーロッパ人が到来する以前の北アメリカについての新しい解釈を、我々はどのように理解すべきなのであろうか。それを考える上でも、これまで行われてきた論争を、今一度、整理しておくことには意味があると思われる。

一、ムーニー＝クローバー説の成立

ヨーロッパ人と接触する以前の北アメリカの先住民人口について、学問的な推定が本格的に行われるようになったのは、今世紀に入ってからのことであった。その中で、最も早く体系的な推定値を発表したのは、スミソニアン研究所のアメリカ民族学局に所属していた民族学者ジェームズ・ムーニー（James Mooney）であった。彼の研究は、一九一〇年にアメリカ民族学局から発行された*Handbook of American Indians North of Mexico*の中に短い論説の形で掲載された。そこで提示されたヨーロッパ人到来時の北アメリカの先住民人口の推定値は、グリーンランドの先住民人口の推定値一万人を含め、全体で一一四万八〇〇〇人というものだった。[5]

しかしながら、この時ムーニーは、この推定の根拠や、その算出方法について、詳しい説明を行っていなかった。それらが、おおよそ明らかにされたのは、ムーニーが一九二一年に死亡した後のことで、彼の同僚であったジョン・

R・スワントン（John R. Swanton）が、ムーニーの遺稿と資料をまとめて、新たに一一五万二九五〇人という推定値を、一九二八年に発表した時だった。[6] それによると、ムーニーが依拠した推定方法は、一般に推測法（Dead Reckoning Method）と呼ばれる方法で、基本的には、推定者の知識と判断力だけを頼りに推定を行うというものだった。そして、彼が用いた具体的な推定の手順は、まず個々の部族の推定値を、彼らと最初に接触したヨーロッパ人が残した記録や、それが無い場合には、他の研究者が提示している推定値を利用して見積り、次にそれを、それぞれの部族が居住する地域別に合算して、地域ごとの小計を出し、その上で北アメリカ全体の推定値を算出するというものだった。また一方、ムーニーが先住民人口を推定するにあたって選定した年代は、それぞれの地域が、白人との接触を開始した年代というものであったため、地域によってばらつきが見られ、その期間も、一六〇〇年から一八四五年までと、非常に幅の広いものであった。[7]

このスワントンによって再発表されたムーニーの遺作に対する評価は、ムーニー自身の研究者としての名声に支えられて、一般に高いものであった。確かに、同時代の研究者の中には、地理学者のカール・サッパー（Karl Sapper）や民族学者のウィリアム・マクラウド（William Macleod）のように、ムーニーのものに比べると、はるかに高い推定値を提示する者もいた。しかし、彼らの研究は、分析の詳細さにおいて、ムーニーの研究に及ばなかったため、大きな影響力を持つには至らなかった。[8]

これに対し、一九三〇年代になると、新たに別の重要な推定が、カリフォルニア大学バークレイ校の人類学者アルフレッド・L・クローバー（Alfred L. Kroeber）によって提示された。彼は、一九三四年に *American Anthropologist* 誌上で発表した論文と、さらに一九三九年に出版した *Cultural and Natural Areas of Native North America* の中で、ムーニーの推定値は基本的には正しいが、まだ高すぎると論じた。[9] 特にクローバーが問題としたのは、彼自身が専門としているカリフォルニア地域に関するムーニーの推定値で、これを彼自身が独自に推定した低い値に置き換えれば、より正確な推定値が求められると主張した。そして、一旦ムーニーの推定値を一〇〇万人程度にまで引き下げた上で、さらにまた、カリフォルニア以外の地域の推定もカリフォルニアの例に倣って見直すことを試み、最終的に、ヨーロッパ人と接触する以前の北アメリカの人口は、およそ九〇万人であったとするのが妥当であると結論した。

この推定においてクローバーが用いた推定方法は、基本

的に、ムーニーと同じものだった。ただしクローバーは、接触当時ヨーロッパ人によって記録された先住民人口は、ほとんどの場合、誇張されたものであると疑っていたため、そのような記録を利用して推定を行う時には、他の史料との比較などを通して、できるだけ低い見積りを出すことが、より正確な推定値に近づく方法であると考えていた。[10] それゆえ、全体として見ると、彼の推定値は、ムーニーのものより低く抑えられたものとなったのである。しかし、人類学の権威クローバーが、もう一人の権威であるムーニーの推定を、おおむね是認したことの影響は大きかった。これ以後、ムーニーとクローバーによって提示された一〇〇万人前後という推定値が、研究者一般に受け入れられ、長らく批判を受けないという状態が続いた。

二、ドビンズ説の登場

この権威ある推定値に対し、決定的な批判が加えられるようになったのは、実に一九六〇年代半ばになってからのことであった。中でも、人類学者のヘンリー・F・ドビンズ（Henry F. Dobyns）が、一九六六年に *Current Anthropology* 誌上で発表した論文は、まさに画期的なものであった。[11] その中で、ドビンズは、ムーニーやクローバーのものをはじめとするこれまでの推定を、方法論の上から分析し、その欠点や限界を指摘した。そして、従来の研究者の推定値が、あまりにも低いものとなったのは、彼らが、ヨーロッパ人によって残された先住民人口に関する記録を、適切に評価した上で利用していないこと、さらにまた、ヨーロッパから持ち込まれた各種の伝染病によって引き起こされた急激な人口減少について、十分に考慮していないことが、主な原因であると主張した。

以上のような批判を行った上で、ドビンズは、人口減少率を過去の先住民人口の推定に応用するという、斬新な推定方法を提案した。彼はまず、アメリカ大陸の各地で、ヨーロッパ人との接触以後、伝染病の流行などにより発生した先住民人口の減少を示すデータを集め、それぞれの地域の人口減少率を計算した。そして、それらを比較・検討した結果、接触以後アメリカ大陸の全般で発生した人口減少を示す平均的な値としては、二〇対一から二五対一という比率が妥当なものであると結論するに至った。次に彼は、この比率を、北アメリカにおいて先住民が最も減少した時点の人口数と掛け合わせることで、北アメリカが本来有していた人口数を算出しようと試みた。このようにして求められた接触以前の人口推定値は、九八〇万人から一二二五万人という、これまでのものとは比較にならないほど高い値

であった。

しかしながら、このようなドビンズの画期的な研究は、決して唐突に現われたものではなかった。彼の推定に大きな影響を与えた先行研究が、すでに一九三〇年代後半から、生理学者シャーバーン・F・クック（Sherburne F. Cook）らを中心とする、カリフォルニア大学バークレイ校のグループによって始められていたのである。[12] 彼らは、長年にわたり、伝染病が先住民に与えた衝撃について研究を積み重ねた結果、一四九二年当時の先住民人口は、ほとんどの権威ある研究者が考えているよりも、ずっと多かったと確信するようになっていた。[13] しかし、彼らが研究対象としていた地域が、主にスペイン人やメキシコ人によって残された史料が豊富な、カリフォルニアやメキシコに限定されていたため、その研究成果が、ムーニーやクローバーの北アメリカ全体についての推定に、直接脅威を与えるということにはならなかったのである。

これに対し、ドビンズによる、まさしく桁違いの推定値の発表は、研究者の間に大きな反響を巻き起こした。特に、彼が新たに提唱した人口減少率を人口推定に応用するという手法に対しては、様々な批判が寄せられたが、[14] その反面、大筋では賛同する研究者も次第に表われるようになり、その後の推定に、少なからぬ影響を与えていった。

その最も顕著な例が、人類学者のハロルド・E・ドライヴァー（Harold E. Driver）の推定である。彼は、一九六一年に出版した*Indians of North America*の初版において、ムーニーやクローバーの推定値に言及しながら、一四九二年当時の北アメリカの人口を、一〇〇万人から二〇〇万人と推定していた。[15] しかし、一九六九年に出版した改訂第二版においては、ドビンズの人口減少率を応用する手法を受け入れて、その推定値を、三五〇万人へと上方修正している。[16] ただし、この修正を行うにあたりドライヴァーは、ドビンズが提示した人口減少率の値は大きすぎるとして、より低い比率を採用していること、さらにまた、ドビンズが推定人口を算出する際基準とした北アメリカの先住民人口の最低値は、実際に人口が最低に落ち込んだ時点のものではないとして、[17] データの差し替えを行っているため、結果として算出された推定値は、ドビンズのものより、かなり低めのものとなったのである。

結局のところ、ほとんどの研究者にとって、推定方法以上に受け入れにくかったものは、ドビンズが提示した、あまりに高い推定値の方だった。それゆえ各研究者は、一九六六年以降今日に至るまで、いかにドビンズ以上に説得力のある推定値を提示できるか、競い合っている観がある。ただ、そうした状況の中にあっても、一つだけ否定できな

いことは、ドビンズの研究が刺激となって、他の研究者の推定値が、徐々に上昇し始めたということだった。

例えば、自然人類学者のダグラス・H・ウーベレイカー（Douglas H. Ubelaker）は、一九七六年に、スミソニアン研究所に保存されていたムーニーの公にされていないメモ類を整理して、そこに記載されていた部族別の推定値を、現代の研究者から集めた最新のデータを利用しながら再検証した結果、新たに二一七万一一二五人という推定値を発表している。[18] この推定値は、一見まだ低いもののようであるが、ウーベレイカーのように、推定方法においては、ムーニーのものが一番精度が高いと考えていた研究者でさえ、その推定値に修正を加える必要を感じたという点は注目に値する。

ウーベレイカーは、権威のある推定値を修正することに対し、慎重な立場であったため、新しく算定した推定値が、極端に上昇するということはなかったが、他の研究者の中には、より積極的に高い推定値を提示する者もいた。その例が、地理学者のウィリアム・M・デネヴァン（William M. Deneven）の推定である。彼は、やはり一九七六年に、自らが編集した *The Native Population of the Americas in 1492* において、これまでの諸研究を詳細に比較・検討した結果、四四〇万人という推定値を妥当なものとして提示している。[19] 彼がこの推定値を算定するにあたり、特に考慮した点は、ヨーロッパ人による記録が採られる以前に発生した先住民人口の減少を、推定に盛り込むということだった。これは明らかに、伝染病による人口減少を重視するドビンズらの研究が与えた影響だった。

三、一九八〇年代以降の動向

一九六〇年代後半から始まった推定値の上昇傾向は、一九八〇年代に入ると、一層顕著になっていった。そして、それに拍車を掛けたのは、またしてもドビンズであった。彼は一九八三年に、主としてフロリダの先住民人口について検討を加えた著作 *Their Number Become Thinned* を発表し、その中で、一六世紀初めのメキシコ北部を含む北アメリカの先住民人口を、新たに約一八〇〇万人と推定したのである。[20] しかし、この推定値を算定するにあたりドビンズは、以前のものとは異なる推定方法を採用していた。今回の方法は、いわゆる環境収容力（Carring Capacity）という理論に基づいたもので、ある地域の自然環境と、そこに居住する人々の食糧を獲得する技術の水準が分かっている場合、その地域が扶養できる人口規模というものは、生態学的に割り出すことができるというものだった。ただ

し、この方法を用いて人口推定を行った場合、割り出される推定値は、ドビンズのものが示している通り、極端に高いものとなる傾向があった。

この点に関してドビンズは、トーマス・マルサス(Thomas Malthus)の理論に一部依拠しながら、ヨーロッパ人が到来する以前のアメリカ大陸には、人口増加を妨げる深刻な病気が存在していなかったため、食糧資源が扶養できる限界まで人口が増大していたのだと説明した。そして、非常に稠密であった北アメリカの先住民人口が、各地で本格的にヨーロッパ人との接触が始まる以前に激減したのは、ヨーロッパから持ち込まれ、一六世紀に中米を経由して蔓延した天然痘をはじめとする伝染病が原因であったと主張した。[21]

このドビンズによって展開された議論は、非常に刺激的なものであったため、再度研究者の間に、賛否両論の反応を呼び起こした。[22] 例えば、社会学者のラッセル・ソーントン(Russell Thornton)は、一九八七年に出版した*American Indian Holocaust and Survival*において、ドビンズが推定で依拠しているマルサス理論の援用の仕方について批判を加え、その一八〇〇万人という推定値は、法外なものであると否定した。[23] この批判の中でソーントンは、人間社会は病気という要因以外にも、戦争、飢餓といった人口を抑制する装置を有しているものであり、この点については、マルサス自身も『人口論』の中で言及していると指摘した上で、ヨーロッパ人が到来する以前の先住民人口は、許容限度いっぱいまでは増加していなかったと仮定する方が妥当だと主張した。そして自らは、ドビンズが一九六六年に提唱した人口減少率を利用する推定方法の方に賛意を表わし、それを用いることによって、七〇二万人から八七七万五〇〇〇人という推定値を算出した。[24]

また、これに対し、考古学者のアン・F・ラメノフスキー(Ann F. Ramenofsky)は、同じく一九八七年に出版した*Vectors of Death*において、一六世紀に伝染病の蔓延による激しい人口減少が北アメリカで発生したとするドビンズの説に着目し、これを考古学のデータに基づいて検証しようと試みた。[25] 彼女は、合衆国内から三ケ所をテスト・ケースとして選び、それぞれの地域にある先住民の集落遺跡の数が、時代とともに、どのように変化するのか分析した。その結果、人口減少が発生した時期は、ドビンズが想定している以上に、地域によってばらつきが見られたと結論しながらも、基本的には、ドビンズの説は正しいと肯定した。そして自らは、ヨーロッパ人が到来する以前の北アメリカには、少なくとも一二〇〇万人の先住民がいたはずだと推定した。

以上のように、一九八三年のドビンズの研究に対する評価は、研究者によって実に多様なものとなっており、単純に賛否を表明するだけには留まらず、さらに議論を発展させて分析を加えているものが多い。[26] しかしその反面、彼が新たに提示した一八〇〇万人という推定値そのものに対しては、まれに例外はあるものの、[27] 否定的な見解が大勢を占めている。そして、今のところ、この値を越える推定値は、現われていない。

しかしながら、ドビンズが異なる方法を用いて、再度他を圧倒するような推定値を発表したことは、明らかに研究の進展と、議論の活発化を招いた。彼は、北アメリカの先住民人口の推定という研究分野に存在していた数字上の、そして方法論上の制約を、二度にわたって取り払ったのである。今やほとんどの研究者は、ヨーロッパ人が到来する以前の北アメリカに、約一〇〇万人の先住民しかいなかったと考えることは、時代遅れで、あまりに保守的と感じるようになってきている。

さて、それではいったい、どれ位の推定値ならば妥当なものなのであろうか。各研究者から発表される推定値の幅が、さらに拡大していく傾向にある現在、それを提示することは、ますます困難になっている（表一参照）。どの推定値を受け入れるのかという問題は、あくまで、個々の研究者の判断に任されているのである。

おわりに

以上、現在に至るまでの主要な研究について概観してきたが、最後に、各研究者の提示する推定値が、なぜこれほどまでに異なったものになるのかという問題について、若干補足しておきたい。一般に、推定値の差を生み出している最大の要因は、それぞれの研究者が採用した推定方法の違いにあると考えられがちである。しかし、実際には、研究者の抱いている歴史認識というものの方が、より本質的な部分で、推定結果を左右しているということに注目する必要がある。

この点に関しては、歴史学者のウッドロウ・ボーラ（Woodrow Borah）が、以下に挙げるような、二つの重要な視点を提示している。[28] その第一のものは、ヨーロッパ人が到来する以前の先住民の社会を、研究者が本来、どのようなものとして捉えているのかという問題である。それを、複雑に発達した大きなものであったと捉えている場合と、未発達で小さなものであったと捉えている場合では、結果として推定される人口の規模に大きな差が出てくるのである。[29] 次に、第二のものであるが、ヨーロッパ人が到来

表1　北アメリカ先住民の人口推定値　（単位:万人）

発表年	推定者（職業・専門分野）	推定年代	推定値
1841	George Catilin（画家）	1492	1600
1860	Emmanuel Domenech（宣教師）	1492	1600－1700
1910	James Mooney（民族学）	1600－1845	114.8
1924	Karl Sapper（地理学）	1492	250－350
1924	Paul Rivert（言語学）	1492	114.8
1928	James Mooney（民族学）	1600－1845	115.3
1928	William MacLeod（民族学）	1492	300
1931	Walter Willcox（経済学）	1650	100.2
1934	Alfred L. Kroeber（人類学）	1600－1845	90
1934	Clark Wissler（人類学）	1780	75
1939	Alfred L. Kroeber（人類学）	1600－1845	90
1945	Angel Rosenblat（言語学）	1492	100
1945	Julian Steward（人類学）	1500	100
1952	Paul Rivert et al.（言語学）	1550	131.6
1954	Angel Rosenblat（言語学）	1492	100
1961	Harold E. Driver（人類学）	1492	100－200
1966	Henry F. Dobyns（人類学）	1492	980－1225
1969	Harold E. Driver（人類学）	1492	350
1976	Douglas Ubelaker（自然人類学）	1492	217.1
1976	William Denevan（地理学）	1492	440
1981	Fekri Hassan（人類学）	1600	112
1983	J. Donald Hughes（歴史学）	1492	500－1000
1983	Henry F. Dobyns（人類学）	ca.1500	1800
1987	Russell Thornton（社会学）	1492	702－877.5
1987	Ann Ramenofsky（考古学）	1492	1200
1988	Douglas Ubelaker（自然人類学）	1500	189.4
1989	Rudolph Zambardino（数学）	1492	200－800

出典:John D. Daniels, "The Indian Population of North America in 1492",William and Mary Quarterly, 3 rd Ser., 49 (1992), Table Ⅱをもとに作成。

した以後の歴史を、研究者がどのように解釈しているのかという問題である。稠密な人口を抱え、繁栄していた先住民の社会を、ヨーロッパ人が破壊してしまったと解釈している場合と、未開だったアメリカ大陸に、ヨーロッパ人が文明を持ち込み、その後の発展を支えてきたと解釈している場合とでは、先住民が被った人口崩壊に対する評価が大きく異なってくるのである。

以上のような二つの視点に対して、社会学者のソーントンは、さらに第三の視点として、「政治的な偏向」という問題が存在していると指摘している。そして、それを説明するために、人口史学者のS・ライアン・ジョハンソン（S. Ryan Johansson）の以下の文章を引用している。[30]

「相反する推定値を評価する際、忘れてならない最も重要な点は、わずかの例外を除いて、ほとんどのものが、公然と、或いは暗に、政治的そして文化的な偏向に、影響されているということである。一般的に言って、最初の頃に行われた……推定は、先住民に関するものなら何であれ価値を認めようとしない『ヨーロッパ人支持派』（“Pro-Europeans”）によってなされたものであった。新大陸の、特に北アメリカの住人は、技術の面で極度に原始的だったとする議論は、……低い人口推定値と緊密に結びついていた。それゆえ、ヨーロッパ人は、人口が一〇〇万人以下の広大な土地に入植していたのであり、それに続いて発生した希薄な先住民人口の消滅、或いは減少は、大規模な悲劇ではなかったと見なされてきたのであった。[31]」

ジョハンソンは、さらに続けて、これに対し高い人口推定値は、先住民の技術や文化の水準の高さを否定する「ヨーロッパ人支持派」の考えに対抗するため、「先住民支持派」（“Pro-Nativists”）によって提示されたものであると論じている。[32] ここで、ジョハンソンが採用した「ヨーロッパ人支持派」、或いは「先住民支持派」といった表現が適切なものであるかはともかくとして、このような政治的見解の相違が、先住民の人口動態をめぐる議論の中に根強く存在することは明らかである。そして近年、歴史を先住民の側から見直すべきだと考える研究者が増えるにつれて、このような相違に対する関心はさらに高まってきている。[33]

以上挙げてきた三つの視点は、まさに、それぞれの研究者が、この五〇〇年間の歴史を、どのように認識しているのかという点を明らかにするものである。それゆえ、これらの視点を通してこれまでの研究を評価した場合、我々はそこに、単なる推定値の高低や、推定方法の優劣以上の含意を見いだすことになる。それをどのように受け止め、自己の研究に反映させていくのかという問題は、我々自身の歴史認識にかかっているのである。

註

(1) David E. Stannard, *American Holocaust: Columbus and the Conquest of the New World*, New York: Oxford University Press, 1992, p.X.

(2) Russell Thornton, *American Indian Holocaust and Survival: A Population History Since 1492*, Norman: University of Oklahoma Press, 1987, p. 16. 最も頻繁に引用され、長年議論を呼んできたこの地域の先住民人口についての記録は、エスペニョーラ島に関するラス・カサスの報告である。ラス・カサス、染田秀藤訳『インディアスの破壊についての簡潔な報告』(岩波書店、一九七六年)一九―二〇頁参照。

(3) William M. Denevan, "Introduction of Part V: North America," in William M. Denevan ed., *The Native Population of the Americas in 1492*, Madison: University of Wisconsin Press, 1976, p. 235.

(4) Woodrow Borah, "The Historical Demography of Aboriginal and Colonial America: An Attempt at Perspective," in Denevan ed., *ibid.*, p.15.

(5) James Mooney, "Population," in Frederik Webb Hodge ed., *Handbook of American Indians North of Mexico*, Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology Bulletin no.30, Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1910, vol.2, pp.286−287.

(6) James Mooney, "The Aboriginal Population of America North of Mexico," in John R. Swanton ed., *Smithsonian Miscellaneous Collections*, vol.80, no.7, Washington, D.C.: Smithsonian Institution, 1928, pp. 1−40.

(7) ムーニーは、白人が初めて先住民と接触を持った時点にこだわっていたにもかかわらず、それ以後の研究者は、彼の意に反し、彼の推定値を、しばしば一四九二年の先住民人口として扱ってきている。Thornton, *op. cit.*, p.28.

(8) John D. Daniels, "The Indian Population of North America in 1492," *William and Mary Quarterly*, 3rd Ser., 49 (1992) ,p.312.両者の推定値については表一を参照。

(9) Alfred L. Kroeber, "Native American Population," *American Anthropologist*, New Ser., 36 (1934), pp.1−25; Alfred L. Kroeber, *Cultural and Natural Areas of Native North America*, University of California Publications in American Archaeology and Ethnology, 38, Berkeley: University of California Press, 1939, pp.131−181.

(10) Kroeber, *Cultural and Natural Areas of Native North America*, pp. 180−181.

(11) Henry F. Dobyns, "Estimating Aboriginal American Population: An Appraisal of Techniques with a New Hemispheric Estimates," *Current Anthropology*, 7−4 (1966) , pp.395−416.

(12) クック以外の研究者には、カール・O・ザウアー (Carl O. Sauer)、レスリー・B・シンプソン (Lesley B. Simpson)、ウッドロウ・ボーラ (Woodrow Borah) などがおり、彼

らの研究成果の多くは、カリフォルニア大学出版局から発行されるIbero-AmericanaとPublication in Geographyの二つのシリーズの中で発表されている。

(13) Daniels, *op. cit.*, pp.312−313.

(14) John W. Bennett et al., "Comments," *Current Anthropology*, 7−4 (1966), pp.425−440.

(15) Harold E. Driver, *Indians of North America*, 1st ed., Chicago: University of Chicago Press, 1961, p.35.

(16) Harold E. Driver, *Indians of North America*, 2nd ed. rev., Chicago: University of Chicago Press, 1969, p.63.

(17) Harold E. Driver, "On the Population Nadir of Indians in the United States," *Current Anthropology*, 9−4 (1968), p.330.

(18) Douglas H. Ubelaker, "Prehistoric New World Population Size: Historical Review and Current Appraisal of North American Estimates," *American Journal of Physical Anthropology*, 45 (1976), pp. 661−665; Douglas H. Ubelaker, "The Sources and Methodology for Mooney's Estimates of North American Indian Population," in Denevan ed., *op.cit.*, pp. 243−288. ウーベレイカーは、一九八八年にも、一九七六年以降集めた最新のデータを利用して、ムーニーの推定値の見直しを行っている。しかし、この時算定された推定値は、一九七六年のものと比べると、約二七万人少ない一八九万四三五〇人というものだった（表1参照）。Douglas H. Ubelaker, "North American Indian Population Size, A.D. 1500 to 1985," *American Journal of Physical Anthropology*, 77 (1988), pp.289−294.

(19) William M. Denevan, "Introduction of Part V: North America," "Epilogue," in Denevan ed., *op. cit.*, pp. 235−241, 289−292.

(20) Henry F. Dobyns, *Their Number Become Thinned: Native American Population Dynamics in Eastern North America*, Knoxville: University of Tennessee Press, 1983, pp. 33−45.

(21) *Ibid.*, pp. 7−32.

(22) *Their Number Become Thinned*に対する好意的な反応としては、以下のものがある。Alfred W. Crosby, Jr., "review," *Pacific Historical Review*, 53 (1984), pp. 219−220; Noble David Cook, "review," *Journal of Southern History*, 50 (1984), pp.630−632. 一方、批判的な反応としては、以下のものがある。William Cronon, review," *Journal of American History*, 71 (1984), pp. 374−375; William G. Sturtevant, "review," *American Historical Review*, 89 (1984), pp. 1380−1381; Daniel K.Richter, "review," *William and Mary Quarterly*, 3rd Ser., 41 (1984), pp. 649−653; David Henige, "If Pigs Could Fly: Timucuan Population and Native American Historical Demography," *Journal of Interdisciplinary History*, 16−4 (1986), pp. 701−720.

(23) Thornton, *op. cit.*, pp.30−32.

(24) *Ibid.*, p.31, table 2−8.

(25) Ann F. Ramenofsky, *Vectors of Death: The Archaeology of European Contact*, Albuquerque: University of New Mexico Press, 1987.

(26) 例えば、ラメノフスキー以外にも、一六世紀の北アメリカに、伝染病の流行があったとするドビンズの説を検証した研究として、Dean R. Snow and Kim M. Lanphear, "European Contact and Indian Depopulation in the Northeast: The Timing of the First Epidemics," *Ethnohistory*, 35−1 (1988), pp.15−33.がある。

(27) ドビンズの推定値を、他の地域との比較を通して、間接的にせよ支持しているものとしては、David E. Stannard, "Disease and Infertility: A New Look at the Demographic Collapse of Native Population in the Wake of Western Contact," *Journal of American Studies*, 24 (1990), pp. 325−350.がある。

(28) Borah, *op. cit.*, pp.18−20.

(29) このような指摘は、ボーラが初めて行ったものではない。すでにドビンズが、一九六六年に発表した論文の冒頭において、「先住民の人口規模について社会科学者が持つ見解は、新世界の文明と文化に対する解釈に、直接影響を与えるものである」と論じている。Dobyns, "Estimating Aboriginal American Population," p.395.

(30) Thornton, *op. cit.*, p.35.

(31) S. Ryan Johanson, "The Demographic History of the Native People of North America: A Selective Bibliography," *Yearbook of Physical Anthropology*, 25 (1982), p.137.

(32) *Ibid.*

(33) 先住民の立場からこの政治的見解の相違に分析を加え、これまでの論争を整理したものとして、Lenore A. Stiffarm with Phil Lane, Jr., "The Demography of Native North America: A Question of American Indian Survival," in M. Annette Jaimes ed., *The State of Native America: Genocide, Colonization, and Resistance*, Boston: South End Press, 1992, pp. 23−53.がある。

（立教大学大学院史学専攻博士課程後期）